11 動

ることに、

<

多

たる

任 な

に

迅 範

意

と

感謝

意

を

隊の

皆様

を引

き T

続

き

る御

御

を

な

意思と能

力

を保

有

支 自

えて

だきます

لخ

か な 会

らお

祈 多

申

上 健

げ 勝 様

ま

争

を

止す

表に

取

ます。 く敬 支える る自

鹿児

県隊友会の皆様

ŧ

郷土発 支

展のため

て、

新

0 り 幸

御

挨

拶

とい

た

ン確保 ることで

は

人支部

亚

原

誠

記

を積

極

的に など、

展 開

さ Þ 災 隊 意

T

応

急 •

復 然災

対応 害等

ど広

友会

皆

様

深

々大きく寄与

さ

れ

 \mathcal{O}

今少

後会員

0 児

皆 島 上

べき

戦争を

後更

日

本が

強

の隊

更 友

並

並びにそれを

政 防

般 行

とよ

県

お

願

11

L

す

することになる。

止 開

が

 \mathcal{O}

侵

攻意思

を

県隊

各 災

 \mathcal{O} 政

施 は

策

推

進

結び

に、

鹿 申

いに

る日

意れ

 \mathcal{O}

参

加

様

な 訓

など自 行さ

活 練

れて 大 \mathcal{O} に

いるほ

豪

速・的

確に遂る

等にかい

る雨

お

け

対する協力、 及・啓発や自

防 衛

> 活 識

動 \mathcal{O} 架

重

な任 ため、

務

を

着実に 夜を して

遂

わたるに

務を た広

着 範

実

か 多

てい迅に

また、

平成25

年3月

模災

害

時

に

お

け

県 りま

に

き

ま

Ŕ

は、

本

県

0

危

機

管

理

層

援

り

す

ま

だます。 . 食やか

お

慶 新

CK

申

L

児島

隊

友会に

普

け

橋として、

防

衛

玉 皆

防

昼

わ

こうし

ざ

11 け

ま ま

かに

年を

お

上 迎

が能

5,

県

民と自

衛

隊

 \mathcal{O}

様

お

カコ

れ

ま

り を遂行し

ま

問は、

力と経

一験を発

揮

され

明

して

お

めでとう

れ

まし

ては、

元

衛

官

我 す。

が

取

安全

する各種 総合

災害

対応へ

和

6

年度

安全保障

フォ

0

名に「台湾

• 加

抑 日 者

る 事 5

本 約 有 2

事 に お

いて、

中国は台湾

11

ます。

そのような情

児島

隊

友会

は、

令

お

防

災

訓練

を

はじ

のめ割と

ま

予

備自

官と

て、

そ

いて 環

境 玉

は

厳

L

状

練

参

加など、

数

々

ラ

 Δ

i

n

鹿児

島

を 1

0

月]

備え、

戦

争

止す

め

でも

侵

い向け

着々と準備を

と

の会話となりま

した。 ▼

い。」と、

約1分

間、

陛下

大

グ切に

してお

過ごしくださ

最後に「これからも

もたか。

を

いてお

いる

や、中、

自

衛

隊 況

0 が

て

いただ

2 7

日(日) 鹿児島市

元 勤

と題

して講話を

実

施

態勢を固 のためた

めて

西

諸

島へ います。

 \mathcal{O}

部

者

交

幕僚

長

岩

田

清

文 で、

氏

を

現

在

 \mathcal{O}

玉

際

社

会

は、

展

開、

米 南

不軍の早

年

頭

定に基づい

自

然災

向 送

灘

を

る 宮 急

た分震県の県地の日搬

P

年

8 月 生する

0)

安全保

才

ラ

開

県事

務

次 フ

長

後

藤 ム

光

して

主

義

国家

ては瀕

万 お 会

雷 礼 \mathcal{O} 講

拍手

もと盛大

と か。

はありませ

めりませんでしたか次に「何か困難な

なこ です

に

終了し \mathcal{O}

た。 \mathcal{O}

主は

などその

秩序

危

村

山文彦·

会長

から 郷友

うなお

仕事

をされたの

終了

後、

県

れ 前

ました。最初に

.<u>-</u> ど

 \mathcal{O} け

で目

が合って声を掛

よらの

のことばがあ

り、

深刻な脅威にさらされ

局障

げたの協

定」

 \mathcal{O}

締結以

降、

る

隊

友

会

 \mathcal{O}

協力に

関

る

1)

致

しま

だき、厚くお礼申し応急対策等に御尽力

上い 害 司 す

影響によ

市

玉

域での給

水支 る霧島 源とす

ま

知

隊

9

0

緊迫の度

高

新 県 隊友 会長 二郎

方に 極接 し 上 健勝にて ことと、 的 に 旧 げま おか そし 児島 年 中 は、 L 心より 新 れましては、 てご家族 県隊 た各 年をお迎えの 県 友会員 支 本 お 部 部 慶 び 申 と 皆 \mathcal{O} 密 様 積 ク り ス お 通

て お るこ 隊 0 \Diamond で 友 ご協力 لح を ライナ せな 増し チナ情勢も さて、 がで けるイスラエ がとうござい 御礼 きま つつありま ・ ご 支 侵攻の 中 我が ロシア 様方 のた。 国を 益 中 げ ル 行 東 Þ ま 取 地 す。

そしてミ 保 義 を露にしつつ 障環 極 方、 東 地 サイ 域に 益々 おけ る中 る安全 り巻 権 等 し 玉 さ

会活 な 活 を 順調に より、 進

ŋ 日 災

によるウ ました。 パレ 治ちも見 域に ح な 'n だと ありま 改革 站基 応能力の強化、後方・充実、宇宙・サイバー る憲法改正 \mathcal{O} 整 地 これまでの 安全保証 を見 攻撃能力を含む こうした中、 それ を急 盤の する 考 隊の統合運 すが、 えら 人的基盤 速に推 6 拡 ととも 障 片戦略の の前 れま 充等、 受動 何はとも 提事 進 政 抜 我 更 防 府

とうござい新年明

いけ

ま ま

L

つは、 何 害 あ 処 自 益々厳 可 なる 衛隊を ります 発する大規 しさを はじ が、 んで 取り巻く も迅 模自 員 Þ 増 を常 速に し環つ境 ま いく 諸 す つ然官

が喫緊の 課 項 題 た ので、 極・主導 を 各 家 隊 位 族 \mathcal{O} 义 \mathcal{O} 架

協 の推 はどう に支援 会 と思 啓蒙ととも 対する防 真剣に考える必 考えて 勢拡大と魅力 力 今後とも、 \mathcal{O} Ο 進が り 諸 B と 0 おりま 体と密 衛意識 協力 つ「国民と自 何よりも 県 のある活動 の普及 るために 内の 各支 接 要がある 現 重要だ か」を 市 を 防衛 部 密 自 民 動 0 • 接

きたいと考えてお ・ご協力を宜 年が 7を宜しくお願い5き続きのご支援 ます。 隊友会会員とご

とりまして素 とな 様、そして ま す ょ 関係 晴 う 5

ち 隊 Ŕ 自衛 中に 上自 し 上

敵

勢

は

行◆

刷◆

鹿児島県隊友会

◆発行責任者◆

兒玉 健二郎

(株)新生社

鹿児島市七ツ島

TEL 099-261-0111

◆印

な 衛

る

力 基

つ本が・一つ的国兵対

あ

的に活動して 橋」として、 な連携 して、積 で、積 分 年中 駐屯 ら愛 は、

表 お迎えのことと 支援・ご協力に 上 うござ しまして、 国 一げます。 一げま かれ 衛隊国分駐 賜りました数 \mathcal{O} 年 分駐 新 新 あ まし け 屯地司 を ま ま 隊 厚く御 ては、 ま お 友 た、 お慶 屯 対 て 健 令 地 々 P お のご 礼 を 旧 び カコ 令 皆 \Diamond 1 の で 申 代 陸 年 申 に 和 等 陸 ŋ \mathcal{O} 執 佐 また、 交流 り行 りや する 児島 き続 による霧島 ました。 村 記念 を 一 き、 隊友 日 山 地 行事 正

べく、 れ 0 る 皆 力 \mathcal{O} 離 の派 連 絡 島を含めた県内 風 1 支援に係る災 遣準備 員の派 0 号 \mathcal{O} 市内 等、 遣 接 害 や 近 連 へ震 派

L た1年でも 得る 現 能力 厳しい任 我 \mathcal{O} が あ 国周 りま 向 務を遂 辺の安 に 努

> に 地 し

進

して参り

ます。

く な 玉 民

政

· 外

交・経済

済

ほ

ぼ

中

- 央でし

た。

程なく

L

ま保

本年

技術

面など全てがそ

て、

天皇陛下が入場さ

域の安心・安全の確

一防の任 即応

路完遂、

民が

 \neg

戦

う」ことに

受章者の席が約700席あに入りました。▼そこは、

る。

軍

事の

みではな

り、

私

は幸いにも最前

列

のあ

し 全 空機 いと ますと、 鹿児島 言っても過 速に 言で 艦 目 船 を

る

分駐

る

衛 そ

隊を明

記す

·べきだ」。

陛下は、壇上から降りから祝辞を賜りました。

た。

6

れ ▼

1

クを交え

て

び

に、

島

友

ま わ

かりやすく 時々ジョ

、説明され

人声から

を廻り

ながら一人二

けられ、そして

私

申し上げ、新年のご挨拶のご健勝・ご多幸を祈念心からお祈りし、皆様方 なく、

盛大 は じ 様 屯 寸 地 体 に夏 \mathcal{O}

域の 深 \otimes 皆 て ま 様 と

桜

 \mathcal{O}

して

平年も何時如何なこのような情熱

勢

 \mathcal{O}

中

戦う

か

 \mathcal{O}

衛は、

午

大臣

最 5 謝

月 1 して

3 目

は、私

の人生

高の一日でした。

▼

当

日 で

が低がにたの 1 - め意

祝 あ

賀会に招

り、その後海幕長主催

会に招かれました。午その後海幕長主催の臣から叙勲の伝達が年前中に防衛省にて防

 \mathcal{O} に、 対応に万全を期 プすとと 災害 全は伴 のの 隊 遣 め行 \sim 主 うや給影

ともに、

態勢を維

持 と る た

全員

が対象であ

強

靭な部

隊を育成する

戦う」

 \mathcal{O}

では

な

\ \ \

れ

ることで知

られ

る豊

明

殿

り 全 国

任に 本

ŧ

即

行

動

ĺ

与えられ

なる事

態

い」と答え

. 2%と世

界最

務を完全に遂行し得

戦 3 は に

争は自

衛

E隊だけ

か 後

い。遅く

に、バスで皇居に

白

宮中晩餐会が催さ

さ

信

頼さ

地

域

地」たる

保障環境は 戦後 最も 転 は 厳 安

を

O

0

を目

頼地の年

2

れた。

6

愛さ

れ

 \mathcal{O} 最後に

第一

歩として

て 「 自

憲法

を改正、

から祝辞なの言葉のの

後、私たちは

陛下

は、受章者代表の

礼

迎えることから、開設70周年の節目

節目

 \mathcal{O}

 \mathcal{O}

対象となることを強

段

高

い所に立たれまし

おたれる。一

る ŋ べさ 域 1

人 ŧ. 係る検 を 5 許 \mathcal{O} めら さ 避 \mathcal{O} た 難 いれており、 め、 いれて 住 民 況に 受 かり、 け あ 県 お 入 ŋ 等 てにか ま断

て ŧ 鹿児島県を取 内 強 おりま \mathcal{O} 化に伴う各 各 で推 衛 さらには 力 さを増 巻く環 さ 整 の抜 備 れ が 等 県 的 境

害への備えも重要性 おります。 火や各 種 \mathcal{O} な 増水 識 強 サ 避 与 につ 強調 化等 さらに我 玉 いて「 され 法整備 退避態 等 が た。 た問国国の民

 \mathcal{O} 島 必 能 確 立 して 要 力 民 性 \mathcal{O} \mathcal{O}

えう

た 上

司

心か

Ġ

感

お \mathcal{O}

ŋ お

ます。 かげと

令 和

6

年

部下

や指導くださっ

で

あり 章を

ました。

現役時

代

12 栄

身に

余る光

さ 上 ま < すようにご祈念申し素晴らしい年となり せて げ、 るエ 新年のご挨 いただきま ル ギ 拶と す。 政

6

います。

私は、

瑞宝小

んけ

まして

で

生最

高の

日

会 の皆 様にとって幸多

帰

線

多くの

期部隊 攻でき 起こさ 困あしせ化 抑展隊そる進有勢 安全保障フォーラム講話参加者

生 とに 功 小 蛇 陛 ことでした。 足です 績 綬 章 きま \mathcal{O} 下 多くの 思 感 直 を 接話し を 紹 以 V 動 間近で拝 が、 上 出となり Ļ ・メッセー 介 は 私に り合 して 南日 本当 顔写 かけられ 謁 でき に有 とつ 頂 真付 本 まし 11 カュ 新 11 て 一 たこ きで たこ 難 6 た 聞 た。 \mathcal{O} が お

-			



炊き出しのカレーライス試食を待つ参加者

友

よる 初め

 \mathcal{O}

労

を Ġ

渡 日 支

 \mathcal{O}

疏

つなぐ

棚

田 羽 竹

T 3 6 と 連 け

 \mathcal{O}

か

重

中 友

長

に

頃

水百

選「筒

部

を

9

ドバイスを受け

なが

出来た。

水百

選

丸

池湧 岳、

水

や豊 本名

富

な

湧水量

を誇る

日 細

出 隊

を実施

が

決まっ

材

員

で、 練 ス、

テ 場

達

ŧ

催

を

分

など た

薩

摩 尾

藩

島

津 跡 公

会

美

味

しく頂

くと共に

住 ス

民

し

松

を

有

カレーラ

イ

食 は

ま を

ライ

を

ま ま

義弘

ŋ

友会支部

会員

で

送

L

然に

井

ま

なれて

X

産

棚

お役

見 員

伊炊初

部し部

務練画

職でもあ

る。

災

訓

練を計画

実

行する

 \vdash

机

子

 \mathcal{O}

L

むことが

出

高

価

警

全力

人げ

挙 殊

努

め

て 防

ま と 犯 を挙 すが、 まし

す。

教 0 0 原

育の教

官であった。

・培っ

務

験皆無の

私

は、

ک –

6ミリ

無反

特技

Ŕ

自

衛官

時

浜佐きの

泰事訓計

長施

はチャ

スと思

自 私

材を除

友会支

(部会員)

に

食 等

を 得

た。

この

協 評

力

神様に

長は

氏局実

衛隊を呼

市で 自衛

害

遣 日

を

想

定

L

た

話

は

トントン拍

子に

決

私

常 派

から

伊

佐

」と返事してし

まった。

とやらと思っていたが、

謝

し上

げ

ま に

どうな

るこ

民

方

心

重迫

長

は

引き受け 練をやら

いです える き出

なら

備万端とし 会員家族

た

L

訓

支部

の支援 女

を貰

じめ

隊

員

 \mathcal{O}

皆

様、 迫 訓 来、

警

備

友会支部会員

家 幹 /性役員

کے

V \

ただいた重

災は、

考えていた。

L

訓

練を計画で

きた

6

ځ

ることになっ

そこで隊区部

隊で

車を使用した被災地

展②域機極 か動的

隊支援による炊

き出

り、

総務部長を引き受

け

隊員の

方々の

積 隊

な支 じめ

援により、

1

高

湧湧

部支

務紹

局介 長

長水水

支

祐事部

は総

総務部長の

は

防 0

令

和 5 返事

総務

的の

炊き出し

訓

練を自

衛

部

を る

九

州 水

第二の

Ш

Ш

隊と

住民が一

体とな

て

が

貫

流

L

て 河

お

り、 \neg 中

長

を正式に引

窓 口

は第12普

通科 き受 入り

隊

[通り実

定 0

島

湾国立

一公園に属

の成 施

果を

る

す 霧

る

栗 江

野

日

 \mathcal{O}

で、

談

務

長を務めて貰

つう人

支援しますよ。」

と す

③ 車 去の

及び防災

/関係

連

0

場

が町

2

じ

。 と 相

談が

あ

快い

をも 年度に

らっ

品等

展示・

説

明 ④

主 装

目 備

町 Щ \otimes

は、

町 麓

 \mathcal{O}

央

ティ そんない

協

議会の

会長

か

談すると、

「大丈夫で

災害支 住民

援

 \mathcal{O}

写真

区

コ

ミュ

重迫

中隊

 \mathcal{O}

担当

幹部

に あ

相

らの

輸送要

領、

友 後藤光の大人の会グラ 協会 ウ 開 ン 催

ルフ大会を実

今大会は鹿児

島

島 に

県

隊友会グラ

· ウンド

1

鹿

ゴ児

家族投

樋脇 令 がラウンドで和6年11日 和 年 1 - ゴルフ場

部

から1

00名(20

チ

議会が担

県内

各区数

仲良し加治木支部チームの面々

溌 溂 個 7 さ づ 7 番 か 参 に県議会議員の本 \mathcal{O} んを激励した。 氏が挨拶し、

なった。

人

戦

は、

女

が性上陣

位が活

番

A チー

 Δ 勝

2 第

O 3

4

点

لح

が準

優

位

が

伊

佐

同 В Δ とプ 才と高齢化 加者の平 レー 94点) ル 距 川内 離を イン 均 ワン が進 支部 含め 9 \mathcal{O} が 5 年 が 2 部 0 齢 優勝 がで 1 m むが 9 の 中 約 Aにた お 9

占めた。

躍

L 個

家族会員等

々 の 成功裏に終了することが お 大会は、 ŋ 進行 康 面も Ļ 問 始、 題なく、 参 加 予 定

へ 投 た お 掃 関詐 \mathcal{O} 疲 活 友 吉牟田会員二 始良支部 始良支部 か良支部 (する対策) 稿 れ 動、 会 様 \mathcal{O} です。 部 皆 欺 会 隊 様、 事 を \sim 二 頂今の日 件 等 男 に 口 激 き Þ 関 ま 新 励 0

秋晴れの絶好の

ル

フ 日

等

プ

レー

として参

加。

の会員・家族が

和

 \mathcal{O}

もと、

セ ゴ

 ν

モニ

聞

会員皆

田 し

仕事に П 「実にお ます 多 が、 手

機にかかってきます。 特に高齢者 をだまし 策として、 取る手 \mathcal{O} 固 定 知 口です。 5 電 が 銭

金

詐

ツ

シ

することなく

電話

を

本コンサー

 \vdash

は、1

ましょう。

行

やおかし

いと思ったら

숲

ティアとして支援

L ボ

ま

話で まし

お

金

 \mathcal{O}

駐

車

 \mathcal{O}

導案内

を

を社員2名

ラで同

し تلح

☆長よどと偽って、金母事故等により入院費用が ま せ 関するト オレ詐 金を の方 息子 を紹 要 も多 - ラブル 被害件 を装 求 介 を し L 11 と思 た ま ち り を す 数

号 話には ない 出 白バイ勤務の筆者 な

国的 させ 絶に T 特 い 以上 で合言 現 の方に 在 N T 1

じ

いようお

い応いに

た家

同

付金:

0

は

レ

ン

ド

シ

ッ

プ

٢

支

れ内

ま

たはす、

屋コ

平久とサ

和友

文員

音楽 音楽 よう

フレ

ンド

シ

た。

隊と米海軍第7

自衛

佐

奏会の状況

1本新聞に紹介さた安会の状況は、翌1

れ 日

艦世

南

日

氏

プ合同コンサー

トとし

郵

電話での対力

Τ 応 0 非通, 月 Τ していま 額 使用 日 ディ 拒否 は、 を では7 決めて サー スプ 番号 認 細 料 願 部 で対 レ は ピ 表 O お ス 示 歳 N 1 ま

は

ほどうす

れ

ば

 \mathcal{O}

で

L

氏

ア 島

ルプス

被

す

るに

文 屋

久

隊 友

会員

平

て ツ 隊 保 え

代 田

常に

留守番

機能

に

設

屋久島

離島 月 2

発

総

合

終了

2

日

魅了さ

最後

機

は

定

よう対応し

う。

出

な

で

開

カコ

れ

た合

官等が、 職員 やキャ 員等 必要」など カー F, 親 取る手 や税 を 族・警察 ッシ 装 暗 通 \mathcal{O} 交換 帳 ユ \mathcal{O} 番 や印 カ 名目で 号 で 職 官 手続 キ 員 t k, 銀 通帳 をだ きが

県

市

公的

機関

出 さら

しても

多

大なるご支援

ただ

単に

信

用し の名を

な

いく でく

してください。

に、

捜

索・救

助

活

動

たら、

家族や友

人に 人に相談

オ

スプ

レイ

· 墜 落

事 沖

故に 光空に

力にお軍昨た

1

1月

屋久島

ので 3 受することは絶対に 気を付 還付金 詐 け 欺 ま を直 Ĵ 鑑 な ・カ 警 接 察 授

をか

持って生活

ょ

自

さ衛

ご**隊**

_まの

支思

部い

出

に

鶴

薗曹

剣

道

中です。

現

在は

地元物

り、 その

薗

氏

ていた任務

初級

1

職

を命ぜら だろう。

待

私が

後になりま

ŧ

しれないと

いう意

識

さ

人事と思う

 \mathcal{O}

で だ

対

伝 \mathcal{O}

な

自

分

t

害に

あ

など、い 未払い 取 医 務 自 所の 療費 治 体 かにも 過 年 員と名乗 税 務 電 お VI 署 金 金 話 が を受 をか あ り、 年 P る 特 玉

T

晴 関 5 連 した史 L 跡も 多く、 素

隣 \mathcal{O} 霧 島 に は、 玉 分 清滝神社清掃奉仕活動後の会員

恵ま には、 湧水 あ れた豊かなまち りま 市 史文化 と自 す。 陸 自 また、 霧島 隊 遺 演 で 産 近 習 す。 に 駐

大 れ た本 辰戦争から する ま 社 ま \mathcal{O} 町 で た。 清 清 出 \mathcal{O} 掃 滝 身 間 活動 奉 へ き \mathcal{O} 仕 戦 現後 活

慰 を合 様との良好な関 ても、 すように、 地 常に \mathcal{O} 自えびの送信 は、 さ 防 して訓 T 屯 に努めてお 衛に 域特性でも 皆 お 地、 員の皆 多いことが、 様と接する 関する 住民と自 練等に精 び 宮 \mathcal{O} 湧水支部 りま 県え 湧 様 駐 方 あ 水 理 第二次 解の 係の 励で が、 が位 支部 衛隊 りま 機会 び 地 本 自 \mathcal{O} 及 よ 没 従 走 安 きま とし 活 促構 \mathcal{O} す。 が 衛 置 市 び は動 世 非 世 進 築 皆 \mathcal{O} 隊

と

野を広める事

で

きたと思っている。

 \mathcal{O}

最

後の任

え方の違

い社

 \subseteq 広 年、 L 准 そ



のて全う 大火 迎えたり た。し 年小 望 ても \mathcal{O} \mathcal{O} 道 カュ 隊 4 要な 合宿 毎 半 人 5 中 3 0 · 隊 に 生 て 教 日、これ 4 を希望 期 演 育 は 元 れ ば 部 が 銃 訓 大隊に 始まっ 銃剣 配属され、 川第 9 ること 0 期 普 教 連に L 道 育 た。 は 剣 練 私 普 昭 訓 終 入 な 転 和 道 以 \mathcal{O} 꽢 か 属 4 訓外 後 科 し 第 隊歳 銃 隊

> 7 尉 (4

隊

員

の服

務指

3歳准陸

成

 \mathcal{O} ス

他、

準 一備に

苦労

確信 職務

して

11

ます。こ

うれ

を経験できたお 広報幹部」など た礼節・体力・

蔭 各

7

スケジュール作

し

 \mathcal{O}

캪

年

カコ

Ġ

は、

中隊 導制 と 付 と 付

> 自 カコ と 種 力 で

域

なが 負を

ら頑

張り

ま の為に

す。

たのを

今でも思 教育

心い出す。

らも、

元自衛

官とい

職 寮 縁 平 会 成 Ŕ 1 2 中 導 復 帰後

り は 6 名 す 利180名の寮t 年定 九州 隊対抗銃剣道大 で 教 官であった。 年退 共立 新 鮮で楽) と の 大学 手を 官し、 関

孝格至

伊佐支部

上

文雄

ともに視野を広める事がれていの中で、自衛官との付き合社関係者等々との付き合この間部外協力団体、会に報幹部として約10年に報幹部として約10年に報幹部として約10年に報幹部として約10年 謹 お祈りし んで ŧ

す

新納 国分支部 正 雄

西鮫坂金 元島上峰 倉見谷 正信 山中 峰支部 利雄

志布志支部

と民生児童委員として 監事をさせていただ をさせていただける 公民会長、 現在このような 故郷鹿児島に 代に銃剣 産 館の理 公民 11 種子島所員、所長と平田氏 気 道 活 事 た 館



入場し両音楽隊の演奏に 会場には多くの町民が開催したものであった。 は大拍手で 第7艦隊音楽隊連絡将校と平田氏 *****

-			



約 6

0

羽 いる

指

定 で、 認されて

るツク

В Ш 玉 В 0

定

よう

0

なり

安楽

河

には、 希少種

た

たら

何 等に \mathcal{O}

野 イ

鳥

際的

より一

様

も目にしたことが

あ

る 皆

シギ、

マガモ等

ところで、

地

モメ、

ルガ

オサ

特に冬の 多くの野鳥が

季節

は

野鳥

0

楽

飛来して、

のようになりま

会員の皆様も身近な

メジロ、

姿は

なりま \mathcal{O} 機会が が鹿児島県自然保 委嘱を受けて1 で観察できる野 は、 志布 す。 希少動 多 志市 野 Þ あ 鳥 植 安 等と 物 ラ 鳥 楽 ます 6 推 接 年 進

ツ

ラヘラサ

ギの特

徴は、

ばしが、ヘラの

ように

イソシギ、

イソヒ

墓地 ほぼ

清掃が 毎月

河口には、

ています。

大きさは

限ら

れて

ます。 半島

朝

西 ギの

海 ク

に多い らだそう

力

モであること

カコ

岡県 ガモ

 \mathcal{O}

筑

紫地

方 由

名

 \mathcal{O}

ラヘラサ

心布志支部 鳥観察独 長り 言

泂

口にも

年飛来して

き

万之瀬川

河口、

安楽川

 \mathcal{O}

境 市

界 0

北側に中

央支部

五ヶ別府町を2分会、坂

平 川

南さつま市

島

南に位置し

て、

そ

西

山田 陽 を 1

星ヶ峯、

うご祈念致

霧島 サギ

市隼

姶良

市

加

支部

は字の

如

く鹿

児

分会に分けて北側の

宇

隊友会員

・ご家族の

地域を4

てまいり

ます。

本

なりま

分会、その

にとり

であり

は、

県内の

地とし

決まって

上鹿

笹貫

昭

氏

促児島南支部長 の紹介

直線距離にして約

時に後輩の育成に重

に喜 種の行

る話など

万歳三唱

域の方 を重

州市と接し、 喜入支部及び西

南 1

北

いと思い

ま 0

す。 支

としてできる限り

地域に所在する

支部

小学生から大人でチ

友会歌

会であっ

地元に

貢献

児

支

部

側に

塔の

美

1

く 目



愛車のバイクとともに

かる仕

事で一

合わない。

支 部 般的に

継 が 科 後 手 連隊)を がれた。 りの 陸)バリバリ家 今も現役で として 退職 豆. 自 一腐店の 稼 3 豆 腐 た 実 業

話されていました。

注意し

バ

 \mathcal{O}

の作

: 業 が

してお

Ш

支

りや下払

・ 等 に

高齢者の仲

間とし イク

早く綺麗に終 部としては当日

| 感謝してい

転

で楽

変あり

トレス解消になる」 イクで走る事で自分

لح

 \mathcal{O} 加

前日に一人で

時

間

を

作

きは

をもって激 きまし

励をしま

L

また全体会場では

合同

れ

被災

とし

西

成人氏の乾

で開 執行

 \mathcal{O}

動の発表 宴たけなわ

のあ

介

さ

るかたで】)を紹 (46年間 【自宅の庭を綺麗にさ 年目 川支部発足当 0) さ λ 会員で $\widehat{7}$ 時 3 有 か 歳 る

之内 川員 正 氏

姶 の許 きなバイクで仲 ながら、 地元霧島連山 るとの事で 天草方面に良く 時間外では大 んで - 間と時 ます。 は元 を楽 面 け して お ょ

りがとうござい

ま

す。

年もどうぞよろしく

実施作業(慰霊碑等の

加車両を海上輸送して

県警察:

等の

域現況についての

紹

交換

宮崎

奄美隊友

会旗

支援艦が

島

港 用

8

時に海自多

2 5

日

「新田原基地

して講話

介辺さ自将航

が空れの補空

で開

極的に参加。

また支部

解・ご協力を頂きまし 美支 奄美 部活 支部 秀光 動に、 0

氏 況

ご理

各種 備され本年3月 備決定 成に努めて 後は活 で7

配備後は駐屯地の行う 部会員が

会員家族含む。

が O

加

美支部から1 おけるケガ人役

名

ローズアップされ、

内容であった。

隊友会員

会では日

頃会えな 魅せられ

太鼓の音に

安全保

問

題が

まで以上に南

衛上の緊要地帯として

してきまし

た。

献のため、

温織を立-

職後

も地域へ

0)

間でも語

りつ

た太

鼓

んで頑張って行くとの事

ま

豆腐作り

は夜

9

最後に今後も健康管理

方ま

に

注意し

い豆

腐

りに頑 Ш

張って下さ

支部内にある有名な波之平刀匠遺跡

分会となっています。 会員は56人で少し 主であり 鹿児島戦 残り 焼き刃渡し 摩に入りこ その一つに り跡」が、 名刀、 代に、 9 8 7 9 橋 々と名 りに 正 の波之平地区は、 後に 波之平 ありま 代行安が一条天 波之平刀 適してい 海岸に豊 作ったことか が生ま 木炭が の地 和 は、 の水も 1 0 之平 に住 た 有 条 初 れ あ カゝ その た。 \mathcal{O} り な 4

近

る 波之平系、 で言わ と優劣がつけ 刀波之平系 初代 刀 三代 知県 から五 2行安は 0 うで 系譜 四 代 刀 猿神社に保 五. 六代以 年 \mathcal{O} と言って 五. が 間 た 明 代までを 相 類 ŧ 治 州 続 初 降 と 正 存 が 宗

で 刀

多く 史 が 国から 2 ま 薩 天 代 刀 \mathcal{O} 着 皇 刀

ます。 集に 年が 皆 努

全員での隊友会歌の斉唱

日入 旧 麓(もとふも 産 紹

介

遺産が 景が残って 牧瀬家武家門、小 士が の父肝付 方神社は 有りま 区に 地、 6 5 生きた町」 !兼善が 香 い る 旧 は、 Ο 年 す。 ケ渕 頃 麓 江 眠 \mathcal{O} \mathcal{O} 及る松で原戸日摩 杯び肝帯す風時本の

い是いるなドりやケ で非所素どグエ天渕特す時に下一で晴に一メ気はに。間も 間も散 さまら見りっに季香物 程丁策 度度す しえンルよ節梅

と隊友会活動」 の参加となった。 崎県隊友 賓を含め総 に会長以下23名が参 ロック た。また懇 自 県隊友会は、 会が計画し 一隊と和 会宮崎 忽親会に の間、 と珍し 日 大会 た 事代理、

正久氏等の来賓挨拶

隊友会本部

ブ九 宮口州 原副大ク沖 会研縄 氏 加会

ま

を受けた。 を結びつけ

第 5

る

動会

お会県斉たく予いたれつ中始役の佐県開長で唱。せ定同。大た、さのの藤知 た現を験に研終つ等のパ闘F備救備し基新現 を大力児会今 地満喫基修了て興訓イ機一品難犬 得な本島に回 解た食地のし研味練口の1紹部の基に原研日 散しでの最た修を内ツ見5介隊訓地移航修目し、腹体後。を持容ト学戦、装練警動空はの たる部地際の 支の方し研

肝付家墓地

遺言・相続 交通事故 企業法務 借金 ★他、不動産取引、民事・家事一般、刑事 その悩みを電話で話してみませんか?弁護士 が解決できるかもしれません。※取違い防止 の為、お名前・電話番号をお尋ねします。 5 分間 無料電話 Q&A 法律相談 30分 あたり 5,000円(税別) 交通事故相談は初回無料(物損のみは除く)

なかま法律事務所 加治膣町電停・バス停より徒歩4分

鹿児島市加治屋町 15-20 **2**3099-216-8788

■営業時間/9:00~18:00 ■休業日/土·日·祝日 HP〉検索 なかま法律事務所 鹿児島





弁護士 中間貴志 鹿児島県弁護士会員 隊友会特別会員

*隊友会の皆さん、 気軽に相談でき

新年明けまして おめでとう御座います 本年も宜しくお願い致します



鹿児島偕行会



会長 宮口 修一 元幹部自衛官と旧陸軍将校の会

幹部自衛官OBの皆様、長年に亘り我国防衛 の第一線でのご活躍、大変お疲れ様でした。 鹿児島偕行会は、皆様の入会をお待ちしています。 (連絡先) 鹿児島偕行会事務局 〒892-0815 鹿児島市島居町10-12村田ビル1階 鹿児島県隊友会事務所内

TEL: 099-295-6724 FAX: 099-295-672 (連絡先) 事務局長 宮ノ原拡 携帯 090-7473-5923、Eメール hiro-m@po.mct.ne.jp FAX: 099-295-6723

英霊に敬意を。日本に誇りを。

		,	
I			
1			



いては、

 \mathcal{O}

に

0)

指導

作業を考慮しな

がら

に訓練を実 置の選定に

施で

き

お

作業手

順、構

た大隊・ 事 官として参 今 回 1 霧 目 から2 望事 私は、 実爆 識を持て」及び 項である「 l 場 で 的である 練に O 破能力 目 まで 行 0 大 隊 加わ

陸曹・各分隊長と慎

しました。

積る必要があるため、

腹

の必要資材

いては、

安第8 陸 加 尉

つ目

ついてです。

8 施設大隊 割線に入隊実爆集 に集 参合

三の持つ場・

能力 上並

びに

師団

行き着く

末に、

よう

個人主義と合理主義が

楽しいことをして過ごし

 \mathcal{O} 破 向

の任務を全うした級能力の向上を基

大隊



研究 員の を過ごしました。 き上 昨年は大学 や専門書に読み耽 科)の です。 宇都隆史 げるのに忙しい けまして 島県隊友会の皆 中で、 修 院 いめでと 論文 落 選 日

にお会いする機会が 国内では9月に自民党総 されてきただけ が第102代総理大臣 訳なく思っており 挙が実施され、 年でもありました。 まって みまし いで正論 れまで歯に 年は いることを た。石破 政治 激動 を展 石 ます。 衣 破

口高

ŧ

減って

いますし、

今

齢化に

伴

労働者人

少子

と

いう悲壮な声です。のは「人が足りない

どこへ

行っても耳にす

Щ

積

して

ても耳にするいます。県内

お

ります。

して頂きた

前参議院 議員 迎 史

案を含め「事前に見 重に係 ては ま基全に般 作 討 築 る 統置 で 爆破訓 ける主要 三つ目 ち実爆 び 不 継続 各作 官として当事者意識を持 を 整により 不発弾処 し 員の任 ま 発 はた。 な段 務・役割を明確 処理 を実 0) す 所の状況を掌握 \mathcal{O} 理 報告して円滑 ^べき時刻: 運 所 班 との 階の 等で 施しました。 要領を検討 営に 要の おける各 作 の事故 事前 努め 業に 報 指 等 は 告 置 を 揮 及お

二つ目は、 の選定及び爆破

爆破

業

作業

 \mathcal{O} 位

・指導で

して成長できるように として広範多 .務を達成できるようにして広範多岐にわたる これ した。 を達成することがで 練ができたことを誇 たと自負 からも 合させて 団の各部 温 実 訓練 のあ からい ます。 き 目 る

めま児 西 と申します。 信 島県隊 月に 整備 空警戒 して。 友会の 管制 長 \mathcal{O} 空 口 小 団 信 自 林 奄 衛 美 隊

宋龍河 之信紹 介隊 3曹 介

地は に励 らの趣味であるバスケッ を入れて 努める傍ら、 として知識技量の 配属され、 介させていただきま 員 福岡県の春日基 美市名瀬) であ ルや、入隊以 た整備班 いるランニ 日 奄美大島 学生時 向 整 ン 来 グ 力 代上かに 地に 備 初 出 員

Þ 戸惑っている様子でし でと大きく異 ントや行事で見か 員です。 あ で 邁進して な ただけると本人も と意欲的 をアピー 向きさで先輩たち 潮とし 生まれ \mathcal{O} 指導を受けとめ、 を今後どうぞよろ アピールしていきたいり、地域行事等への積の勤務が叶ったこともの財務が叶ったことも いたします。 が であり、 おります。 た様子で勤 期 ^要たちの親身 の素直さ、前 でした の素を でした ます。 お声が うこれ がけい がけい際 1 務 通 日 親 ま信後 とさせていただきます。 ることがないことを なく、悲しみの報に接 昨年は年明けか 国の安寧と、皆様のご結びに、今年一年の日 直す やみません。 勝ご多幸を 今 - は年明け れませ 時期に来ている 年は大きな災害 当の 衷 民全体で 心より れ ら大 まし 豊 カュ ŧ た変 の考 さ

て働くこと=美徳」とい

より

ませ

の若い世

代は「額に汗

年 奄 3 美 奄美市、 瀬戸内 月 2 6 が 警備隊は、 大和 日に 平 成 創隊 て 村、 11 る 町 宇 以

など防

知

して頂きたいと願って知事として積極的に発ど防衛問題にも鹿児島

マれとか 奄美駐 26 屯も ŧ 地に

でた。当り

防

衛

徒歩による物資輸送訓練の激励受け

努め 隊 泊 方々に対する理解促 令 係 いても各種訓練・ て参り 天城町、 区が第12普通 和6年度 機関及び防衛協 知名町及び与 実効的に対応 警備隊に ま 伊仙町、和 伊 町 2 進域力にの団 行事 す 移 科 論 治 村 る管 町 体の 連

域との連携を強化 町 き \mathcal{O} ま あってのことであ と考えていま により任務遂 が生地 村の各種訓練、行事 続き奄 れからも 皆様のご理 るよう を図ることがで の皆様から信 理機のにを活用した訓練 を強訓練、行事支 を強訓練、行事支 を強訓練、行事支 を強訓練、行事支 を強訓練、行事支 を強力が のことであり、引 を養難島全ての市 のことであり、引 ·標に、 密着した部隊 シマの皆 0 頼は、 更なる す。

村国☆ 田分瑞 仁 鹿山上国規屋元園分 ○ 防存 ☆瑞宝双 衛の 業 功叙 労勲 光 洋孝 光 章 章

殿殿

晴 おれ ごめの いと章 まう す

「川内駐屯地記念日のお知らせ」 自衛隊車両市中パレード

- (1) 日時 R7.2.1(土)
- (2) 場所 国道3号線
- (3) 音楽隊、装甲車等によるパレート
- 2 駐屯地39周年記念式典
- (1) 日時 R7.2.2(日)
- (2) 場所 陸自川内駐屯地
- (3) 観閲式、訓練展示等 問合せ先 川内駐屯地広報班

0996-20-3900(内線205)

「奄美駐屯地・瀬戸内分屯地 開設記念行事のお知らせ」

- (1) 日時 R7.2.2(日)
- (2) 場所 奄美駐屯地
- (3) 内容 観閲式 音楽演奏 訓練展示 体験試乗等
- (4) 問合せ先 奄美警備隊 渉外・広報室 0997-54-1060(内線251)

お口から食べるを生涯サポートいたします! 一般・小児・訪問歯科診療

※ 通院できない方には、訪問診療、食べる呑み込めない方の 摂食、嚥下診療、リハビリもフォローいたします。

(月) \sim (金) 9:00 \sim 12:30 14:00 \sim 18:30 (土) 9:00~13:00 ※ (火)、(木)、(土)午後は訪問診療 休診日 (日)、(祭)、第2(木)、第4(木)

※ 騎射場交差点 角

殿



SENDO 千堂歯科医院

〒890-0056 鹿児島市下荒田3-39-13 山内ビル TEL 099-250-1232 FAX 099-250-1232

70歳までの元気な方募集

業務内容:①警備 ②車両運行管理 ③離島で働きたい方 細部は、ご連絡ください。(担当 : 村田)

株式会社 セノン南九州支社

所 鹿児島市中央町9-1第一生命ビル5階 🚾

電話番号 099(251)4271

FAX 番号 099(258) 1047

